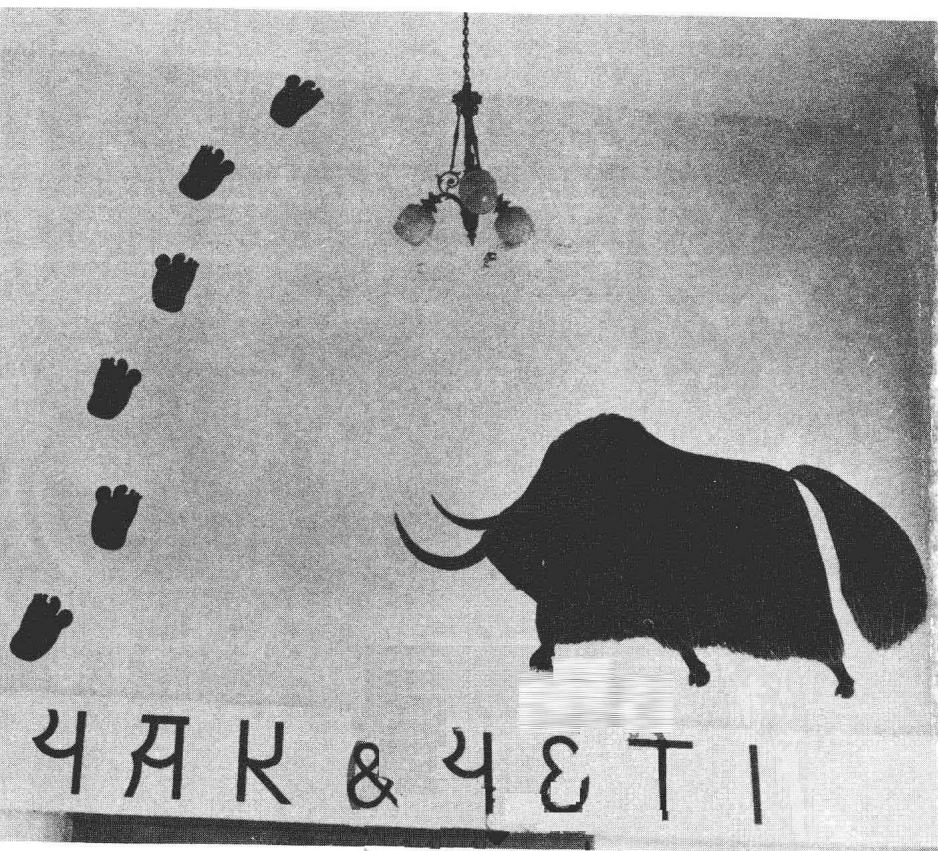


雪 男 ヒマラヤ動物記

林 寿 郎

雪男 ヒマラヤ動物記

林 寿 郎



毎日新聞社

著者の紹介

林 寿郎 (はやし・じゅろう)

1912年1月、神奈川県横須賀市生まれ、東大理学部卒。1951年ケニア動物狩猟旅行、現在、多摩動物公園園長。著書に「アフリカ猛獣狩」「動物童話集」などがある。

雪 男 ヒマラヤ動物記 [著者との申し合わせにより校印を省略します]

昭和 36 年 6 月 1 日 初版

¥ 280

著 者 林 寿 郎
発 行 者 高 木 金 之 助
印 刷 所 中央精版印刷株式会社

発行所 毎 日 新 聞 社

東京都千代田区有楽町 1 の 11
大阪市北区堂島上 2 の 36
門司市清滝町 1 の 903
名古屋市千代田区堀内町 4 の 1



シブトン氏撮影の雪男の足跡

(1951年メンン川河にて)

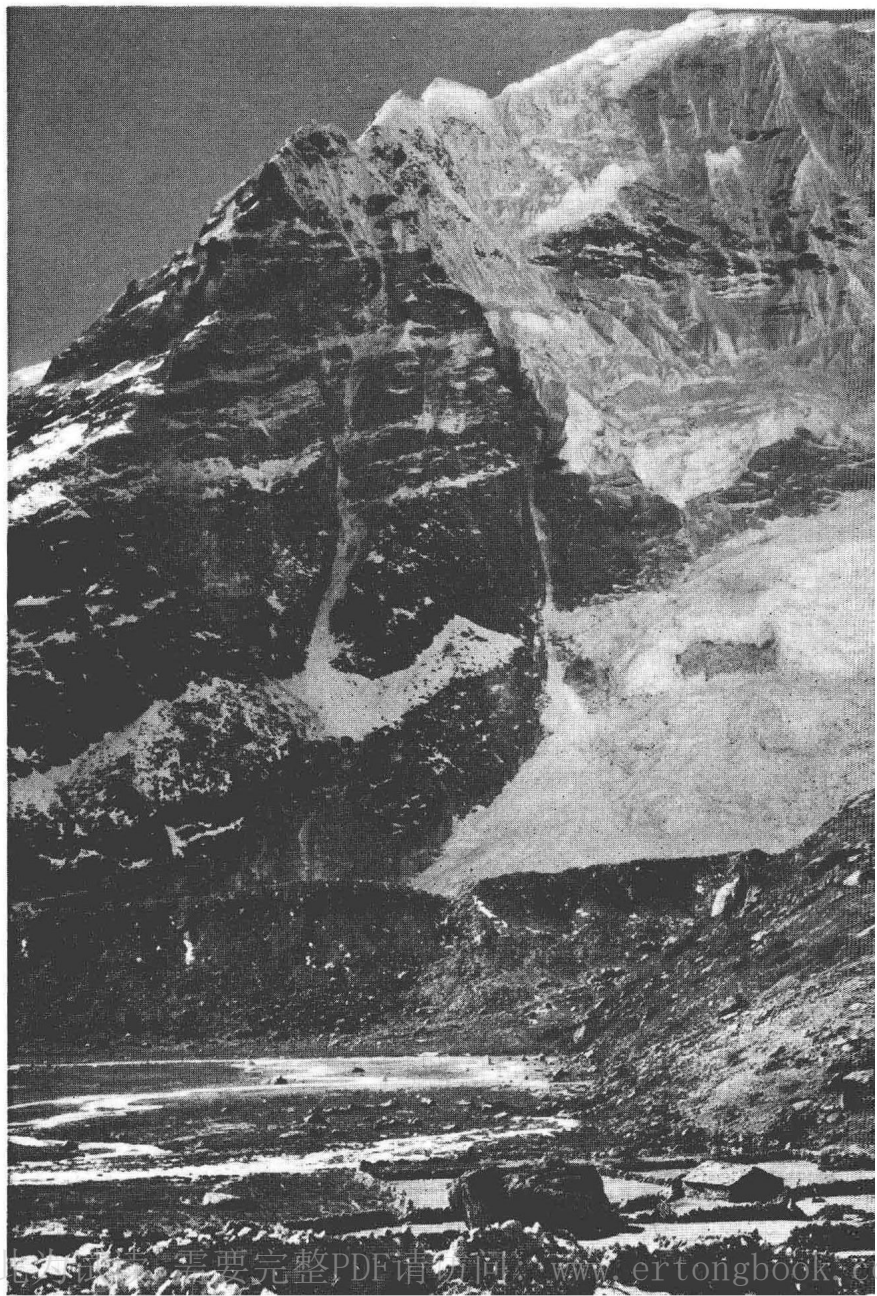
上 親指が大きいことがはっきりわかる。クマは親指と小指が同大か、あるいは小指の方が大きい。哺乳動物で足の親指が発達しているのは人とサルだけ。

下 上の写真の足跡が一系列に並んだものとは思えない。手前から五つ日の足跡をみると、二つの足跡が重複したもののようにもみえる。



ディック

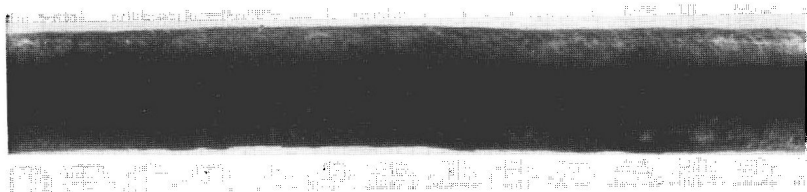
チベット国境から五キロ、下にみえる石小屋で著者は雪男を見張った。



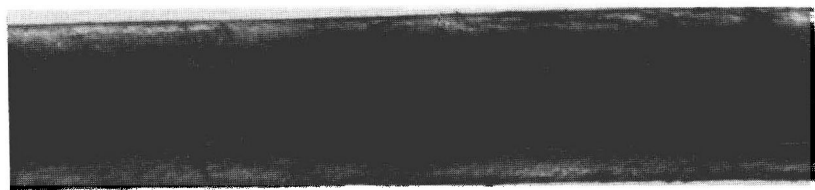


エベレスト クムブ氷河の源頭付近から見る。依田孝喜氏撮影

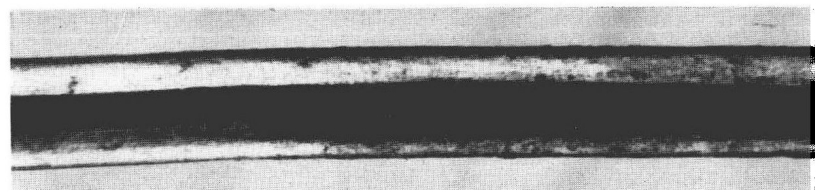
顕微鏡でみた頭皮の毛



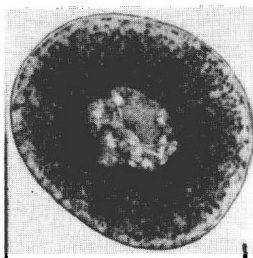
バンポチェのもの



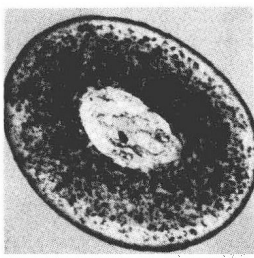
クムジュンのもの



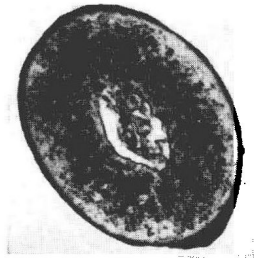
ナムチェバザールのもの



ナムチェバザールのもの

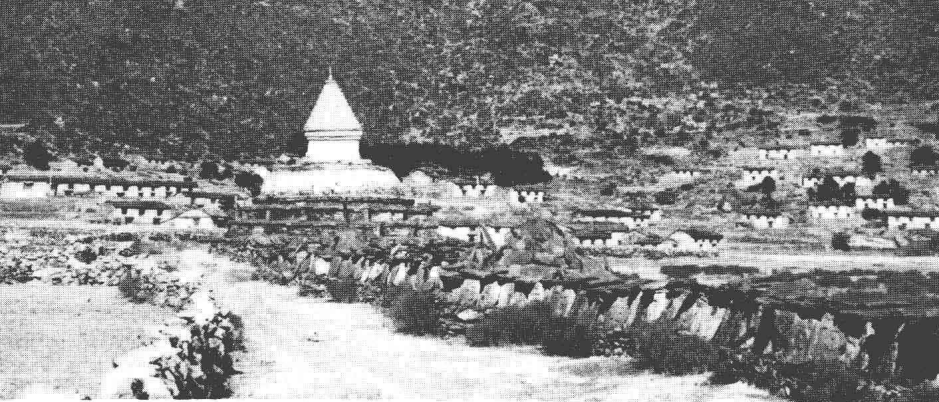


クムジュンのもの

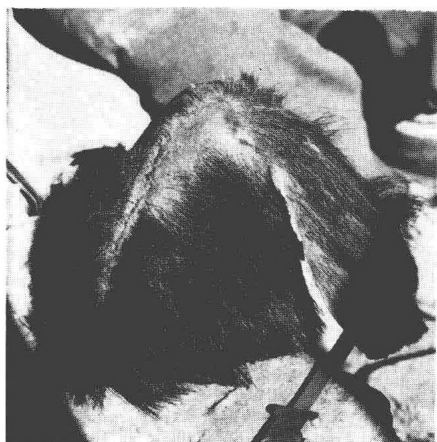


バンポチェのもの

三組とも内部の黒く（横断では白く）みえる所が毛の髄質。毛の太さは三つとも大差なく 0.2 mm ぐらいで、最大のものは 0.25 mm もあり、いちじるしい剛毛なのが特徴。また、この三つの頭皮は毛の性質からして、おそらく同じ種類の動物に属すると考えられる。詳細はあとがき参照。《東大医学部解剖学小川研究室》



雪男の頭皮(下の写真)があるクムジェン部落 (本文 213 ページ参照)



左 前



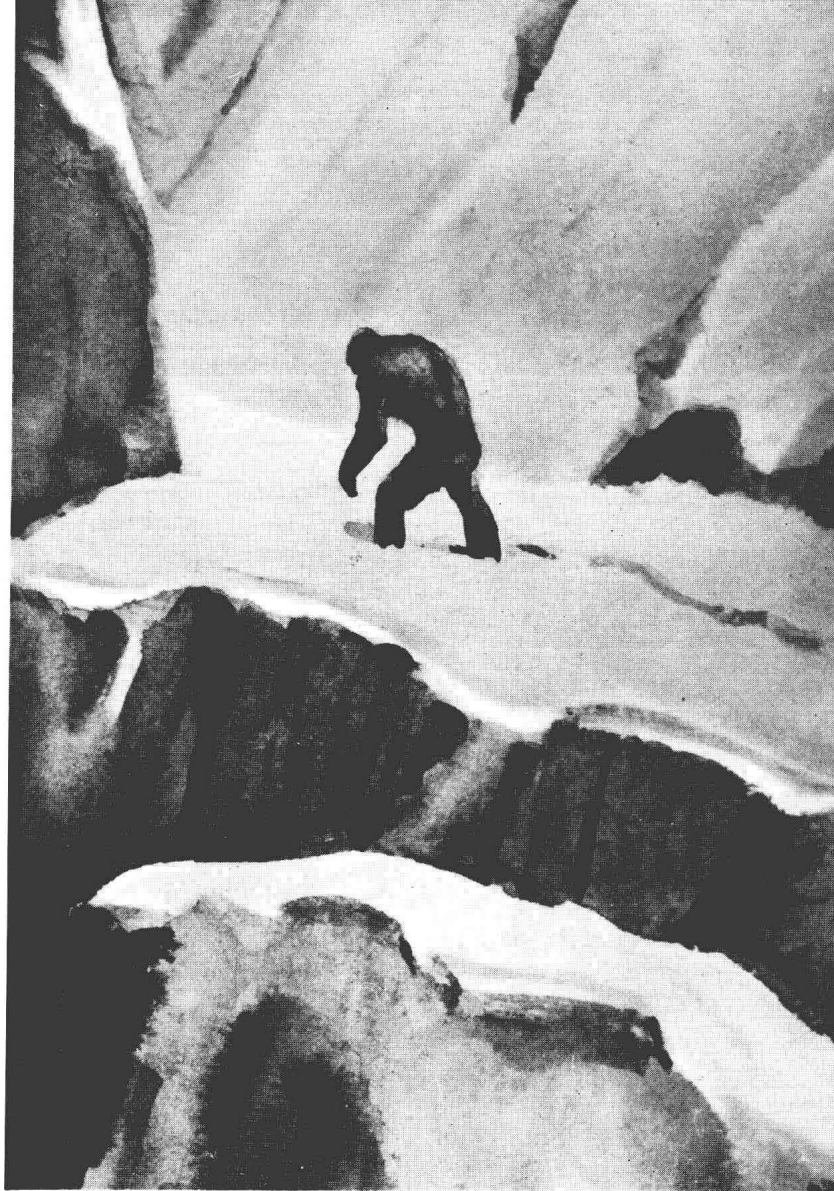
右 前



左 後



右 後

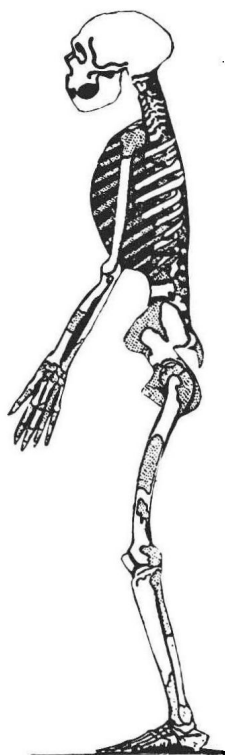


ソ連学者の目撃した雪男？

これは「雑誌ソビエト同盟」1958年発行の第96号に出ている絵である。レニングラード大学、ウズベク共和国科学学士院の合同学術探検隊が、国際地球観測年の計画にしたがって調査をした際、プロニン氏がパミールのフェドチェンコ氷河の無人地帯で、約500メートルの距離から目撃した雪男らしい姿を、後日画家に描かしたもの。



ゴ リ ラ



ネアンデルタール人

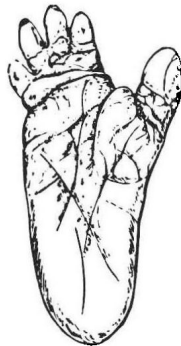
雪男はゴリラより人間に近く、ネアンデルタール人より下等とされている。したがって、雪男はここにあげた人類と類人猿との骨かくおよび足の裏の形を比べて、その中間のものと考えられよう。



オランウータン



チンパンジー



ゴ リ ラ



ネアンデルタール人

バンボチェ寺院に伝わる秘蔵雪男の頭皮をかぶった著者



雪男
ヒマラヤ動物記
目次

*雪男はほんとうにいるか

国家に入山料金を払う

三

シプトン氏発見の足跡

二五

雪男研究グループ

二七

出発準備進む

二

*羽田から空路、ネパールへ

カルカッタのホテルで

三六

米国の雪男探検隊に会う

四三

眼下にエベレストの鋭峰

五〇

カトマンズの寺院

五八

*キャラバンを編成

太った町長と対面 七〇

射撃の腕試し 六八

トラ狩を頼まれる 六三

山賊のようなヒゲづら隊員 一〇四

*ベース・キャンプを設営

シェルパの雇用でひともめ 一二九

作戦を練る 一三〇

雪男捜し開始 一三三

ラングモチェ谷の石小屋 一四五

*ヒマラヤの正月

珍しいジャコウジカ 一五

再び搜索に向かう 一七

パンボチェ寺院の頭皮 一八

ローツェのふもとに着く 一八〇

イタチ、キツネが出現 一八七

*全隊員、ベース・キャンプへ

クムジュンの頭皮 二二

搜索もむなく…… 二三

四足獣でも二足にみえる 二五

帰国 三六

あとがき 二四七

原写真（ロイヤル・ホテルの壁画） 依田 孝喜

写真およびカット 林 寿 郎

雪

男

ヒ
マ
ラ
ヤ
動
物
記